☆Live Bar雷神Presents：ばぐーす長谷川のロック向上委員会☆

『第2回：ブルー・アイド・ソウルって何なの？』

〜おすすめ英国BESを聴く〜

ブルー・アイド・ソウル（以下BES）とは？
ハード・ロックやヘヴィ・メタル、パンク、少しニッチになってブルース・ロックとか、サザン・ロック、スワンプ・ロックetc…といった、様々な細分化されたジャンルのうちの1つ。

青い目のソウル＝ソウルを演奏/歌う白人
直訳すれば意味は理解できるのだが「このどこが青い目のソウルなの？」と、子供の頃は“直感的に理解できず”BESと呼ばれるアーティストのレコードを聴きいつも違和感を感じていた。

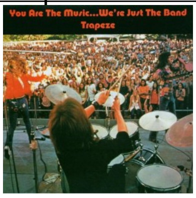
一度、Wikipediaか何かで調べてみて欲しい。BESって誰のことなのか？「えっ、この人も？」という違和感が生まれ、さらに追求してみたくなるかもしれない（笑）。サウンドやアレンジがソウルっぽかったら、みんなBESなのか？と。

私ごとではあるが、青春時代＝80’sの音が好きになれなかったせいもあり、80年代にBESとして紹介されていたアーティストは基本、ホール＆オーツ以外は嫌いだった。好きになったのは20歳を超えてからという遅咲きである。

今回はそんな中、私的に「これぞBESでしょ！」というアーティストを紹介していこうと思う。ただし、時間の都合で【英国】に絞ってのご紹介となります。

先ずは、みなさんよくご存知の（多分）グレン・ヒューズ

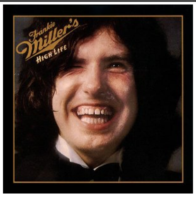
1: Trapeze / Coast To Coast (You Are The Music…We’re Just The Band : 1972)



グレン・ヒューズの代名詞とも言えるバラードの傑作（この後ヒューズ：スロールのアルバムにも再録）。Gのメル・ギャレイの多彩なアレンジが光っており、アコースティックとスライドを隠し味として入れ、楽曲の雰囲気を作り上げている。ソウルとロックの融合が成功した例のひとつでもあり、ロックが持つエッジを全く失わず、レイドバックしすぎてない面もこのバンドならではと言えるだろう。

そしてフランキー・ミラー

2: Frankie Miller / Play Something Sweet (Brickyard Blues) (High Life : 1974)



2nd作。アラン・トゥーサン・プロデュース。フィリーソウルが流行していた事にレーベルが目をつけ、勝手にフィラデルフィアでミックスし直した曰くつきの作品。3曲を除き全ての曲がトゥーサンのナンバーだが、ミラーはそれを上手く消化しており、トゥーサンの個性に埋まる事なく秀逸なアルバムに仕上げている。この曲はスリー・ドッグ・ナイトやマリア・マルダーも取り上げている名曲だ。

3: Frankie Miller / Jealous Guy (Full House : 1977)

4th作。B.Jウィルソン、ポール・キャラックをメンバーに迎え、クリス・スペディング、ラビット、ゲイリー・ブルッカー、そしてメンフィス・ホーンズも参加。ミラーのオリジナル、アンディ・フレイザー作の曲、そしてロビン・トロワーとの共作も見られ、ミラーのこれまでを統括したかのような作品となっている。この曲は言わずもがな、ジョン・レノンの名曲。スワンプなアレンジで聴かせてくれる名演だ。

お次はスティーヴ・ウィンウッド

4: Traffic / Dream Gerrard (When The Eagle Flies : 1974)

ラスト作。ウィンウッド、ジム・キャパルディ、クリス・ウッドの3人に、ジャマイカ出身のロスコ・ジーを迎え制作された作品。この後のウィンウッドのソロを予見するかのような方向性で、ジェントル且つ無国籍な雰囲気が根底に流れた落ち着いた雰囲気に仕上がっている。プロデュースはバンドとクリス・ブラックウェル。

そしてジェス・ローデン

5: Keef Hartley / Circles (Lancashire Hustler : 1973)

Keef Hartley Band解散後リリースされたKHのソロ名義作。KHBの諸作品より話題に上がらない作品だが、ジェス・ローデンやロバート・パーマーら参加メンバーとの相性も良く、英国BESの名盤と言える秀逸な内容を誇っている。音を聴いただけでは、まさかドラマーのソロ・アルバムだとは思えない、歌心満載な作品となっている。

6: Jess Roden / What The Hell (Jess Roden : 1974)

イアン・ギランが脱退したDPの新Voとして名前が挙がるが実現せず、ソロ活動へ。そして制作されたのがジェスの作品中最も有名なこの作品だ。録音はニュー・オーリンズとロンドン。プロデューサーはクリス・ブラックウェルとアラン・トゥーサン。この曲はミック・ウィーヴァー、ラビット、サイモン・カークといった布陣。楽曲の良さもピカイチで、ジェス初心者に最もお勧めの1枚。

7: Paul Kossoff / I'm Ready (Back Street Crawler : 1973)

僅か25年で生涯を閉じてしまったポール・コゾフのソロ作。コゾフのむせび泣くギター、切ないフレーズが堪能でき、ギタリストにとって欠かす事の出来ない作品。特にアルバム冒頭のインスト曲：Tuesday Morningが有名だが、Vo入りの2曲も秀逸。その内1曲がジェス・ローデンだ（他ポール・ロジャース）。ジェスの都会的スマートさと熱いシャウトが素晴らしい名曲である。

ラストはテリー・リード

8: Terry Reid / Dean (River : 1973)

3rd作。彼の作品中、最も人気の高い名盤だ。リードの類稀な表現力に良質な楽曲が並ぶ、英国的スワンプなアルバムに仕上がっている。アコースティック・サイドをエディ・オファード、他スワンプな曲をトム・ダウドがプロデュース。メンバーも白・黒混合のバン

ド・スタイルで、地味ながらも、ロック本来の姿が表された名盤中の名盤と言えるだろう。